日本史上の東と西

高　橋　富　雄*

二つの日本

わたくしは，この 10 年あるいはそれ以上の長い間，馬鹿の一つおぼえのように東北古代のことだけ勉強してまいりました。その結果，このごろ痛感することがあるのであります。東北の一枚看板のように取りざたされていますところのあの「後進性」ということ，古代では「道の奥」「蝦夷の国」などと呼ばれて，征伐・経営だけが問題になってきたあの特殊な歴史——これはもともと東北の専売特許というようなものでなくて，本来は関東地方も中部地方も含めて，要するに東日本全体が持っていたところの歴史の特性であった。なのに東北がもっともおそくまで，しかも念入りにそれを持ち続けたために，いつとはなしに東北の一手販売のようになってしまったのでないか。だとすると，それはむしろ中部や関東の歴史の吹きだまりのようなものと考えらるべきではなかろうか——ざっとそういった次第であります。

「いや，それには及ばぬ。どうぞ東北さん，おひとりで」。東京や名古屋方面のかたがたはそうご遠慮なさるかもしれませんが，歴史屋としては，ここのところは，どうしても東北とつきあってもらわないと困るのです。東北と関東・中部。そうよそよそしい間柄ではなかったのです。

大まかに申しますと，中部地方から東と近畿地方から西とは二つの日本を形成する。対立し抗争しながら日本の歴史を進めてまいったのです。日本の歴史は，そう単純にはじめから一つの日本として同じような進みかたをしてきたのではない。しかもそのはじめにおいては，西日本が一方的に東日本を征服し経営する形をとった。西が中央，東は地方・辺境である。中ごろになって，といいますと鎌倉時代ですが，ここにきて，東が独立し，西に対して対等の歴史をつくり出すようになった。鎌倉幕府というのは，軍事的には全国を支配しましたが，政治的には，東日本の政府で，西日本のことは京都朝廷におまかせするということを，たてまえにしておったのであります。江戸時代になって，東が西に対して断然優越するようになりました。近代における東京支配の歴史は，江戸支配の歴史を体制的に継承・発展させたもの，とみることができます。

しかし，歴史が東から西へ，向きを大きく変えるときにも，東北や北海道は，その一般の東からは区別された，いわば「陽のあたらない東」の位置におかれたのです。北海道はまったくの新世界ですから，これは別としますと，東北はなまじ歴史時代のはじめから歴史に仲間入りさせられながら，西に対してはもとより，中部や関東のような羽ぶりのよい東国に対しても，いつもその引立て役・敵役の位置に立たされ続けてきました。東北の後進性の本質は，そこにあったのです。

本日は，そういった歴史のいわれをたずね，東と西，二つの日本史という構想を大まかに明らかにしてみたいとおもいます。

道の奥と東国

東北と中部・関東，親戚づきあいである，と申しました。ありがた迷惑と思われるかたは，次のようなことを思い出していただきましょう。東北のことを，古代「道の奥」といったのは，政治・文化のゆきとどかぬ未開地の意味であります。「道」とは歩く道とも考えられますが，もっと歴史的に「国」の意味です。たとえば，東方十二道・東方八道・高志（越）道，などということばが

* 文博　東北大学教授　教養部
岩手県出身．東北大学文学部卒．大学院を経て，旧制二高講師，東北大学講師，同助教授を経て現在同大学教授．専門は日本古代史（とくに東北古代史）．東北の古代史に体系を与え，日本古代史のうえにこれを位置づけること，日本の歴史思想に系統的な展望を与えることをめざしておられる．主要著書「奥州藤原四代」「蝦夷」ほか．

あります。これはそれぞれ東方十二国・東方八国・高志（越）国，の意味です。「道の奥」もこのことばの用法に属し，「国の外」の意味だったのです。

ところで，古代では，中部・関東地方のことを「あずま」と呼んだことも，先刻ご承知のとおりであります。これは，従来，「明けつま」ということで，朝日の出るところ，つまり東をさす，というふうにいわれてきました。古事記・日本書紀の物語には，日本武尊が弟橘媛をしのんで「吾妻はや」となげいたのが起こりだとあるのも，地名伝説としてよく知られているとおりです。しかし「あずま」のことばの意味には，もっと確かな出典があるのです。それは平安時代の国語辞典，和名抄（わみようしよう）です。この本では「辺鄙」「田舎」の意味に「あずま」の語義を解しているのです。そうなりますと，あずまもみちのくも，そう違いはない。まず五十歩百歩というところでしょう。現に，蝦夷の夷は「ひな」とも読まれていますが，「ひな」は「鄙」で「辺鄙」「田舎」なのです。東国と道の奥の親戚関係は，これではっきりしました。

もう一つ。東北が蝦夷の国として特殊扱いされたことは周知のとおりです。ところが歴史を調べてみますと，蝦夷の国は何も東北に限ったことではない。中部も関東もそうだったことがわかる。それどころでない。本来，中部や関東が蝦夷の国であって，東北はじつは特殊な蝦夷の国だったのです。けげんにお思いのかたがおいででしたら，日本武尊の蝦夷征伐のことを思い出してください。日本武尊の蝦夷征伐は，伝説的ですけれども，日本史上，最初にくる蝦夷征伐の物語です。この物語はまず伊勢国で神宮から神剣を授かるところから始まります。そして駿河国の草なぎ・焼津伝説，相模国から上総国へ越えるときの弟橘媛の伝説を経て，陸奥国に入って，そこの蝦夷を平げたことになっています。けれども，陸奥の蝦夷征伐というのは，まったく抽象的なものです。これは，もともと物語になくて，後世，蝦夷の本場が陸奥国に移動するようになってからの追加物語だろうと思われます。したがって，上総から常陸国に入り，上野国・甲斐国に入ったというあたりが本伝説でしょう。「新治（にいばり）・筑波をすぎていく夜かねつる」「かがなべて夜には九夜（ここのよ），日には十日を」。この問答は甲斐国の酒折（さかおり）宮でのことだとあります。そして信濃国・越国を平定し，尾張・美濃・近江まで足跡を印して，最後は伊勢にもどり能褒野（のぼの）になくなっております。

全体お読みいただいて，これはとても東北経営などというものでないことがわかります。まさに，中部・関東の東国経営そのものです。蝦夷というのも，単に東国のよからぬ者たち・乱暴者（まつろわぬ人・あらぶる人）という程度に考えられておったのであります。そして最初の蝦夷征伐というものが，じつは中部・関東の蝦夷征伐であることが，これでわかったのであります。としますと，中部・関東も蝦夷の国ということになる。いや，そこがそもそも蝦夷の国発祥の地ということにならねばならないことも，自然の帰結となってまいります。そして，その征服の対象になる東国というのが，伊勢・近江・美濃・尾張から東一帯をさしていたこともわかりますから，要するに畿内から東が東国であり同時に蝦夷の国であります。中部・関東・東北。血のかよった親戚関係ということも，こうしてもはや一点の疑いもなくなったわけです。

えぞすぎぬ

藤原定家といえば，新古今和歌集・小倉百人一首などで音に聞こえた歌人でございます。その歌にこういうのがあります。「えぞすぎぬこれや鈴鹿の関ならむふりすてがたき花のかげかな」。夫木（ふぼく）和歌集というのに載っております。みなさん，すぐ連想なさるでしょう。源義家の有名な勿来（なこそ）の関歌を。「吹く風を勿来の関と思へども道もせに散る山ざくらかな」。情景まったく同じで，発想・措辞もよく似ていますから，定家のは義家のを踏まえて，勿来関を鈴鹿関に移したものといってもよいかもしれません。「えぞすぎぬ」は「なこそ」と同じいいかたです。「このまま通りすぎることができない」と「蝦夷をそうむざむざ通すことはできない」二つがかけられております。そうしますと，鈴鹿関は蝦夷の国に対して備えた関，ということになります。もちろん，これは鎌倉時代に入っての，歌の上のことです。一から十まで事実をいったものではありません。しかし，一定の歴史的な考えかたを踏まえての詩作であることは認めてよろしいでしょう。

東海道五十三次，伊勢国亀山の西隣りが関という宿でございました。このあたりが古代の鈴鹿関のあった場所で関の地名もそれにもとづいております。今日の三重県鈴鹿郡関町にあたります。そうしますと，西は畿内に接してそのすぐ東隣りは蝦夷に対して備えた場所，ということになりますが，いくら何でもそれでは，というお気持ちがどなたにもあろうかとおもいます。しかし，歴史的には，そういうことで誤りがなかったのです。

古代国家がちゃんと整ったころ，といいますと奈良時代のころですが，三関（さんかん）という制度がございました。都の安全を外敵の侵入から守るためにもっとも重視された三つの関で，これは一般の交通取締りの関からは区別されて城の扱いになっていました。鈴鹿関はその一つだったのです。残りの二つは，美濃国の不破（ふわ）関（岐阜県不破郡関が原町）と越前国の愛発（あらち）関（福井県敦賀市）でした。愛発関はのち近江国の逢坂（おうさか）関（滋賀県大津市）に改まり

ます。すぐおわかりになると思いますが，伊勢国は東海道のはじまりになる国，同様にして，近江国・美濃国は東山道のはじまり，越前国は北陸道のはじまりです。古代国家は，外敵は東日本からだけくるもの，という想定のもとに国家体制をととのえていたことになります。仮想敵国は東国だということになってまいります。関東ということばはここから生じ，特別に警戒を要する敵性地帯という意味で「東国」という特別なとらえかたをしたのでした。「東国」が「辺鄙」「田舎」とされたのも単にそこが遅れた地方という程度の意味あいからではありますまい。政治的にこれを敵役としてとらえるときの評価がはいっての呼びかただったといってよい，とおもいます。だとしますと，これは東北を「道の奥」といったのと，まったく同じ発想から出た兄弟語ということになります。

三関から東の，いわゆる関東が仮想敵国だということになれば，それは「蝦夷の国」となるよりほかありません。蝦夷とは東の悪者たちをさすことばでしたから。定家のころの蝦夷の国は白河・勿来関の奥に移動していましたけれども，鈴鹿関の歴史に対する感慨としては「えぞすぎぬ」ではじめて歌にもなり得たのであります。

西日本国家

カンのよろしいみなさんのなかには，だんだんに，これはすこしおかしいぞ，とお思いになるようなかたも出てまいったことでしょう。いったい東は西に対しての東である。東が「東国」なら西は「西国」なのか。「関東」というからには「関西」もなければならぬ道理である。そこはどうなっているのか。まことにおかしなはなしですが，古代にはただ西方とか西海道ということばはあっても「東国」に対する「西国」，「関東」に対する「関西」ということばはなかったのです。ことばがない，というよりも，そういうとらえかた・意識がなかったというのが正しいでしょう。

そうしますと，西日本がつまり古代国家だったから西国がなく東国だけあったということになります。そして，西に従わない東を別扱いして，辺鄙・田舎といういいかたをしたのが，東国観念成立のはじまりだということになります。これは，西日本では，何も対立がなかったということではありません。むしろ，日本史における東と西の大きな対立の第一ラウンドは，西日本の両極にある畿内と筑紫，ないしは畿内と出雲・吉備との間で戦われたといってもよいかもしれません。出雲の国譲り神話や筑紫の天孫降臨神話・海幸山幸物語，さらに神武東征説話，吉備国のたびかさなる反乱物語，そして最後に熊襲・隼人の征討物語などを数えあげてみますと，畿内の政権は，手はじめには，九州・中国の勢力と争っていたといわねばなりません。けれども，それらは，隼人征討を除きますと，大半大和朝廷段階でケリがついています。ですから，みんなおうような物語になっているのです。隼人征討だって，蝦夷征討が本格化する前にもうすんでいます。そして確かな歴史時代に入るときには，もう西日本は畿内に結集され，大和朝廷を先頭に東日本の全面統一にいどむという態勢になっていたのであります。

西日本がなぜそう早く一つにまとまることができたのか。これにはいろいろな理由がありましょうが，大きく二つのことが考えられます。一つは，日本の政治的統一も文化の進展もみな朝鮮半島を通して大陸とのかかわりで推進されているために，西日本の統一が促進された，ということです。二つ目に，地理的に瀬戸内海が九州・中国・四国・畿内を一つに結ぶ広場の役目をはたし，西日本はおのずから「環瀬戸内世界」としてのまとまりをなしていたことがあげられます。その西日本国家の首都がすぐ東国に隣りして位置しているのですから，この国家が東国に対して積極姿勢で臨もうとする気がまえもうかがわれるわけであります。

フォッサ・マグナ

日本列島は面積だけでいいますと 37 万 km^2 しかありません。これは 956 万 km^2 もある中国の 26 分の 1 ぐらいにしかあたらない小国です。しかし，その南北の長さは大隅半島の南端で北緯 31°，宗谷岬で 45°30′。もし沖縄列島の南端から千島列島の北端までをはかりますと，それは北緯 24° から 51° にわたるのであります。これは，中国大陸の南北の長さにほぼ同じなのです。日本は南北の長さにおいては，中国と同じくらいの大国の地理的様相を示すのです。実際，九州では 3 月 20 日には満開の花が，北海道では 5 月 10 日に開く，というくらいの違いがあります。一歩一歩かみしめるように歩いて国づくりを進めた時代において，これだけのひろがりを示す日本列島が南と北，ないし西と東で大きな違いを示したとしても，すこしもふしぎでありません。むしろ，中国などでも「南船北馬」といわれたような違いが，ここでも認められるのが自然だというべきでしょう。事実，学問上，そういう指摘がなされているのです。

Edmund Naumann (1854～1927) が明治初年日本にきて，東京大学地質学初代教授となり地質調査所を起こして，日本地質学育ての親になったことは周知のとおりであります。1885 年，ベルリンで発行した "Über den Bau und die Entstehung der japanischen Inseln" において，いわゆる "Fossa Magna" の理論を提唱して，日本列島は中部日本を南北に走る大地溝（ないし地裂）

帯によって，東西二つの日本に分断される，といったことは，あまりに有名です。もっともこの理論にはすぐ批判がありまして，その Fossa Magna というのは，もともと一つのものとしてできていた日本が，あとで地溝によって二つに分かれたものでなしに，もともと複数的にできていた構造体が，急カーブで結びついた，いわゆる“Scharung”（対曲）にのちになってきれつが生じたものだろうという見解が大勢を占めて，現在では，南弯山系・北弯山系の二つの褶曲山脈から日本列島は成立するという考えに落ちついているのだと思います。それにしましても，日本列島が中部日本で大きく東西二つの日本に区別される，という意味でのフォッサ・マグナ説は，いまもってすこしも改まっていないのです。

さて，そのフオッサ・マグナ線ですが，いちおう新潟県の西端に近い糸魚川市から姫川をさかのぼり，長野県大町・岡谷を経て諏訪湖の西をとおり，山梨県釜無川から静岡県富士川をくだって静岡市にいたる線，普通「糸魚川—静岡構造線」と呼ばれるものが，その境界線だと考えられています。正確には，これはフォッサ・マグナ帯の西縁でその東縁はどこかまだ確定されていないし，ナウマンじしん，これは東と西の漸移帯というふうに考えるべきだと，反対者との論争過程で幅のある説明のしかたをしていますから，これは，日本列島には東日本と西日本のはっきりした別のあることを，ある幅をもって述べた学説として大きな意義があるというべきでしょう。

これに対して，小川琢治博士の説では，フォッサ・マグナもさることながら，日本列島では伊勢湾と敦賀湾とを結ぶ線と，利根川の形成する境界線で，自然に西南日本・中央日本・東北日本の三つが区分される，とされているのも，歴史的に見ると参考になる区分法です。そこで，地理学上の区分としては，フォッサ・マグナを基準線として，東がもっとも西よりになると敦賀—伊勢湾線まで西進する，西がもっとも東よりになれば利根川あたりの線までおし出すという理解もできようと思います。

いずれにしましても，自然地理的に，日本が単純に一つの構造体でないこと，中央日本で大きく二つに分かれることが明らかになりました。問題は，歴史や文化においても，同じように系統的な違いを東と西で指摘できるかどうかに，かかってくるわけであります。

関東弁と関西弁

今日でも日本語にはさまざまな方言がありますが，それは大まかに関東弁と関西弁に大別されます。その境界線は，新潟県・長野県・静岡県の西辺に引かれて，そこから東が関東弁，西が関西弁ですから，これはフォッサ・マグナの線にそっています。この事実は，いまから 400 年前，切支丹が日本にきて，日本語の勉強をしたときにも，はっきり感じられたことでした。宣教師のロドリゲスという人の「日本語大文典」という本には，三河から東ではひどく粗野なことばが用いられているとあって，日本語の東と西の違いを指摘しているのです。国語学者のうちには，このようなことばの違いは万葉集における東歌（あずまうた）や防人歌（さきもりうた）以来のものだとして，それは東日本に住んだ人たちと，西日本に住んだ人たちが，体質的にも異なっていたことに関係あるのでないかといったりするかたさえあります。たとえば，日本人のうちでも，西日本人は圧倒的にA型の血液型が多い。これに対して，東日本ではB型が断然多い。それは大きく近畿と中部の間で境いされる。東日本でも東北がもっともB型が多く，青森県は最高である。そしてアイヌが典型的なB型民族である。そんなことから，東と西の違いには，アイヌ的なものと日本人的なものとの違いも関係があるのでないかといったりするのです。すぐにアイヌと日本人とまではいかないかもしれませんが，フォッサ・マグナの生活のうえでも，大きな境界線になっていることは疑いない。

考古学上の東と西

「縄文土器」を「縄文式土器」と呼んだのには，じつはわけがありました。それは，縄文のはっきりしたものは東日本だけで，中国・四国になるとだんだん縄文が稀薄になり，九州になどなりますと，まったく縄文のない縄文土器もあるからです。そこで，ただ「縄文土器」といっては，縄文のない土器にすまないというので「縄文式土器」と呼んで様式上の名称としたのです。のちには九州方面にも，縄文の施文が行なわれるようになりますが，西日本では最後まで純縄文という特色は稀薄でした。その境界線も中部と近畿の間にありました。

弥生の稲作りは，日本の歴史に最初の革命をもたらす文化ですが，これは北九州に始まると同時に，一世紀もたたないうちに，またたく間に伊勢湾までは一気にひろまりました。しかし，そこから東へはさらに一世紀以上もたたないとひろまりませんでした。これは，縄文プロパーの風土たる東日本と縄文になじまぬ西日本の違いが，そのまま逆な形であらわれたものといってよいわけです。

弥生の金属文化の伝播についても同じことがいえます。西日本では銅鉾・銅剣を主とするか銅鈴を主とするかの違いはあっても，青銅器文化の分布は例外なく見られました。しかし，東日本での青銅器文化は愛知県で事実上終わりです。静岡県・長野県にはわずかに痕跡を残すという程度の分布が認められるにすぎません。その東にはまったく及ばないのです。東と西の違いは，こうして，伝統的な停滞対先進的な文化という対立に，ここか

ら色分けされるようになってきたのです。

あずまの都督

日本書紀のなかには第 10 代の崇神天皇の御代のはなしとして，豊城命というのに，東国の統治を命じ活目尊には天皇として，宗主権を継がせたという伝えがあります。これは，日本を西と東二つに分けて統治したことを示すものではないかと考えられたりしています。現に，この豊城命の子孫は東国 15 国の総督に任ぜられたとあったりして，これがのちの毛野氏の先祖ということになります。おびただしい数の古墳と東日本を代表する大古墳が毛野国つまり群馬・栃木方面に集中していることからも，毛野国したがって毛野氏ないしその祖先が東日本の大支配者であったことは確かだろうと思います。東国を特別な植民地とみなし，その経営に力をそそいでいた大和朝廷が，そこを特別な行政区，一種の自治領のような扱いをし，東国の朝廷のようなものを置いて支配にあたらせたということはあり得ないことではありません。現に大化改新の時にも，まっさきに国司を置いて，その地方行政の整備をはかったのは，畿内と東国でした。それをとおして西日本の要の畿内と，東国，あずまの国とに，二つの政治の目を持たせて，古代国家の体制をととのえていこうとする考えをみることができるわけです。ただし，東国がそのように重視されたというのは，植民地行政としての重視です。東国が自前でそういう政治をつくり出したというものではなかったことは，忘れないでほしいとおもいます。

防人と柵戸

古代では九州の防備にあたる兵士をとくに防人といいました。これに対して，東北の蝦夷経営のための城柵に屯田兵として送りこまれた農民兼兵士のことを柵戸といいました。これらはもともと国家的な仕事ですから，すべての国のすべての人たちが，平等にその義務を分かち合うべきものです。制度のたてまえは実際そうなっていました。たとえば「軍防令」という軍隊制度の規定を見ますと，防人というのは全国の壮丁が平等に負担することになっている。しかし，実際にそれが行なわれているところについて見ると，それは東国だけの特別兵役になっています。すなわち，万葉集によってみると，防人は静岡県・長野県から東の兵士だけに限られた強制労働になっているのです。

同じように，蝦夷征伐というのは，国家の大事業であるのに，東北の蝦夷征伐に兵士・労務者や食糧などが徴発されるのは東国だけからでした。もっとも過酷な，鎮兵という城柵守備隊や屯田兵の柵戸なども全部東国から選抜されました。鎮兵というのはやがて地元兵に肩替りされますが，柵戸の入植だけは最後まで，しかも大量に東国から徴発され，北の開拓の前線に送りこまれたのです。文献ではっきりしている範囲は，越前から北，尾張から東です。三関で線を引き東国に限った特別義務なのです。

いったい，どこの国のいつの時代でも，兵士役というのは一番重い労働です。あまり歓迎される性質のものでない。辺境の兵役が東国にだけ負わされる形をとっているのは，東国が古代国家に対して植民地的に服従するものとして位置づけられていたから，としか考えられません。しかも，たてまえは西も東も平等ということになっていてのことなだけに，東国の特殊扱いということが，余計鮮明にうつるわけです。万葉集の防人歌など，そういう気持ちでよみますと，なお深い歴史的感慨を誘うものがあろうかと思います。かれらが同じ東日本の蝦夷征伐に向かう時の歌が鎮兵歌とか柵戸歌とかいう形で残っていないのを，わたくしその点まことに残念に思うのです。

東国行政府の成立

だんだんお話してまいったところから，わたくしは，日本がほんとうにひっくりかえるような革命的できごとがあるとすれば，いまの論点からする限り，西と東の比重・支配関係が入れ替わることでなければならぬ，そんなふうに思うのです。わたくしは，源頼朝という人の鎌倉幕府の樹立がそれを達成した画期的なできごとだったとおもいます。そして，関東地方では平将門の乱，東北地方では安倍氏の前九年の役，清原氏の後三年の役は，頼朝ないしその武士団のために，そのような革命の地ならしをした重要な事件だったと考えています。とくに平泉藤原氏の一世紀にわたる平泉政権は，地方が，とくに東国が，中央から独立した政権を組織する実験を確実になしとげたものとして，鎌倉幕府の模型づくりの役割をはたしたものと評価すべきものです。鎌倉幕府は平泉政権を東日本全体に拡大したものであったのです。

鎌倉幕府に結集した武士たちは，この政権が，東国の武士と農民固有の独立を守るものでなければならぬことをはっきり自覚していました。だから，それは京都の，ないし西の支配者の政権であってはならなかったのです。鎌倉の，つまり東国の政権ということは，こうしてこの政権にとって必然的なものでありました。そのことは，京都の政府も認めていました。この政権は東海・東山両道を支配する政権，つまり東国行政府だとされていたのです。東日本に畿内の政府とは別に自前の政府ができる，それが公認されるということは，日本の歴史はじ

まって以来の変革です。人はすぐ鎌倉幕府を京都朝廷にかわった日本政府のように考えます。それはいかにもこの政権を高く評価するようで，その実，かんじんのところをあいまいにするものです。鎌倉幕府は終始一貫，東国行政府でした。形式上京都朝廷が上にあっただけではない。実際の政治でも，軍事・警察権を除いては，西日本の政治は朝廷にまかせる態度をとりました。それによって，東の政府，武士の独立，地方の利害ということを眼目とする政治が，より明瞭になり，そのために西においても東の力によらねば世の中は治まらないという評価をかち得まして，自然に全国政権の座におしあげられたのです。ここに，東国的・地方的・武士的組織としての封建制も，はじめて明確になって，古代から中世への転換もなしとげ得たのです。同じ武士でも西日本中心の武士で，京都に巣くった平氏では，封建政府になり得なかったことを考える必要があります。わたくしは，鎌倉時代から中世になる，封建制になるのは，ただ鎌倉幕府が武士の政権だったからだとする説には賛成しない。それは，東国人の組織だったから封建制になり得たのだと考えています。そして，西日本支配者としての古代貴族の政治にも，うちかつことができたのだと思っています。

一つ注目すべきことがここではじまります。それは，東国に対する西国，関東に対する関西ということばの使いかたが，ここで成立するということです。たとえば，関東28か国の地頭職に対して関西38か国の地頭職というようないいかたがはじまります。「西国の政治は天皇がなさるのだ」といういいかたが出たり，「西国警固役」ということばが用いられたりしています。これは，古代にはなかったことです。先に述べたとおり，古代では，西がつまり国家だったのです。いまや東国が独立し西と対等になりむしろ逆に東国から西を位置づける立場が成立したから，ここに関西とか西国ということも必要になり可能になったのです。新しい日本史の成立です。

関が原の役

慶長5年（1600）9月15日，といいますとご存じ天下分け目の関が原の戦いのあった日でございます。西軍石田三成方8万，東軍徳川家康方7万5000。夜来の雨はようようあがったものの，咫尺を弁ぜぬ朝霧が立ちこめる戦場だった。早焼，西軍宇喜多秀家の後尾隊と東軍福島正則の前衛とが関路で接触しても，おたがい敵か味方かわからぬ遭遇戦で幕あけした。午前8時，主力部隊の交戦となりました。その結果がどうなったかは，ここで申し上げる必要はないとおもいます。

ここで申し上げたいのは，西軍・東軍の天下を分ける大会戦がとくに関が原というところで戦われたことの意味についてです。普通は，この戦いの結果が重大だったために関が原も記憶されていると思います。しかし，このお話をお聞きくださったかたにとっては，この場所の重大性のゆえに天下分け目の戦いもここを戦場としたということになるでしょう。理由はもう説明するまでもない。関が原――それは三関の一つ不破関の故地です。古来，東と西とを分けてきた国境の険だったのです。西と東とが天下の覇権を争う戦いの場となれば，これこそまさにその場でなければならないこともわかるわけです。

この戦いは，ひとり石田と徳川，ないし豊臣と徳川との運命をかけた戦いであっただけでありません。古代以来，畿内に結集された西日本の政治支配に最後のとどめをさし，東日本の政治支配を最終的に決定した点で，頼朝が開いた「東の支配」という課題を完成したものといってよかろうと思います。大阪の陣は関が原の仕上げという程度に理解しておいていいでしょう。

よく，信長・秀吉・家康ならべて議論いたします。信長は初代秀吉で，家康は二代秀吉だというふうに考えられています。そういう面もあります。しかし，わたくしは，この「日本史上の東と西」の講演者として，信長・秀吉と家康の間に太い線を引きたいのです。信長と秀吉は，結局において京都や大阪の支配者になりました。その限りにおいて，古代的・西日本的なものの新しい継承者にすぎません。秀吉のもとでほんとうに封建制が育ちえたかどうか，わたくしは疑問に思います。江戸の家康には征夷大将軍したがって幕府でなければならぬ必然性がありました。それは「東国の論理」というようなものでしょう。京都の信長，大阪の秀吉には右大臣・関白でよかったのです。それは，「西国の論理」というようにいってよいと思います。これは，新しい形の清盛（信長・秀吉）と頼朝（家康）の問題と見ることもできます。

わたくしは，徳川氏の制覇は現代のはじまりという見かたもあってよいとおもいます。なぜなら，江戸の支配が東京の支配を直接に引き出しているからです。それだけでない。さかのぼって鎌倉が東京のはじまりだということもできるでしょう。わたくしは，封建と近代という対比だけを歴史の唯一のシェーアのように思いこんで，鎌倉―江戸―東京の連帯を認めないような史観には賛成でないのです。

最後に。京に田舎ありということばがあります。西日本にも都のはなやかさのかげで冷飯だけ食わされた田舎もありました。山陰・南四国・南九州のようなところです。江戸や東京が日の出の勢になっても東北や北海道はずっと日陰者でがまんしてきました。日本国民の歴史は，今後，そういう谷間の人たちにどのようにして歴史の市民権を与えるかということを課題にすべきでしょう。東と西は，東京と大阪だけであってはならないのです。